

論 文

解読の紛らわしさ

—— 英日翻訳の欠点について ——

ルディン・サリト

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Lost In Translation

The Ambiguity of English-Japanese Translation: Hiroshima City Example

Ludin Sarit

要旨: グローバル化とは経済・政治、文化など様々な側面において、従来の国家・地域の垣根を越え、地球規模で資本や情報のやり取りが行われることである。一面では、グローバル化とは各国の文化や言語の区別を超えることである。しかし、実際にはグローバル化が各国の文化と言語における特殊な概念を描き出す。本研究では、英語の“Culture”、“Manners”、“Etiquette”や“Behaviour”と日本語の“礼儀”、“エチケット”、“マナー”、“作法”や“行儀”を比較する。本研究の結果、誤解の問題点は文化的な概念の相違が言語の使用で見られることがわかった。本稿では文化や言語の関係性と解読の紛らわしさを明らかにして、英日翻訳の欠点を説明する。

キーワード: 文化、言語、グローバル化、解読、紛らわしい

Abstract: Globalization, a development of closer economic, political and cultural relations among all countries around the globe as a result of travel and communication becoming easy. On the surface, globalization seems to surpass the cultural and lingual difference of each country by making it closer. However, the globalization in fact, strengthens the difference of cultural and lingual notions of each country. In this paper, we will compare the English notions of “Culture”, “Manners”, “Etiquette” and “Behaviour” with the Japanese notions of “Bunka”, “Reigi”, “Mana-a”, Echiketto, “Saho-u” and “Reigi”. The results of this research will show that miscommunication in language occur due to the cultural difference in the concept of each terminology mentioned above. This paper aims to clarify the connection between culture and language. By doing so, the paper will explain the ambiguity of decoding - that is the “weak link” in English-Japanese translation.

Key words: culture, language, globalization, decoding, ambiguity

1. 研究の背景

グローバル化について研究するため、一部の先行研究は経済的・政治的側面に主眼を置いている。その他の先行研究では文化的・言語学的側面などについて焦点を当てる。その4つの側面はそれぞれ複合的に交わっている。この混合はグローバル化が与える影響である。Hallは繰り返しコミュニケーション、文化と言語の関係性を明らかにした(1959、1976、1987)。BrownとLevinsonはグローバル化が全世界の過程を経て、「ポライトネス理論」を万国共通のコミュニケーションストラテジーとした(1987)。Bertonは政治的側面から米国、中国、ロシアと日本を比べ、各国の異なる文化について議論した(1998)。UchidaとOgihara(2014)は心理的側面から文化の変化について議論した。これらの研究には共通点が1つある。グローバル化とコミュニケーションの中の関係性が不可分であるということである。

本稿では解説の紛らわしさを英日翻訳の欠点を議論する。まず、英語の“Culture”、“Manners”、“Etiquette”と“Behaviour”や日本語の“礼儀”、“エチケット”、“マナー”、“作法”と“行儀”に焦点を当てる。その後、各言語の概念の区別を明らかにする。最後に、ミスコミュニケーションの原因や解決方法を提案する。

1.1 先行研究

欧米諸国と日本におけるグローバル化の影響とコミュニケーションストラテジーの研究テーマは目新しい話題ではない。先行研究は2つの大きなグループに分類することができる。①政治的側面(Hall、1987; Berton、1998など)。②用語と文化的側面(HaughとHinze、2003; Gudyknost、Matsumoto、Ting-Toomy、Nishida、KimとHeyman、1996など)。各グループは自分の議論を強調するために“高コンテキスト(あるいは高コンテクスト)”、“低コンテキスト(あるいは低コンテクスト)”と“ポライトネス”(丁寧さ、礼儀正しさ)などの用語を主眼に置いて、文化の区別を説明した。

1.2 先行研究の欠点

各研究者は自分の議論を強調するために、翻訳した部分を文字通りの意味で翻訳した。しかし、文字通りの意味で翻訳すると語彙の元の文化概念を含めることができない。一方、自分の母語の文化概念が含まれることにもなる。

それでは誤解を招き、コミュニケーションの問題点を解決することができない。例えば、Haugh と Hinze は“Politeness”（ポライトネス）を礼儀正しさ、丁寧さと翻訳した。確かに、文字通りの意味で英語の“ポライトネス”は“丁寧さ”という意味である。しかし、“礼儀正しさ”には“所作”が含まれており、“丁寧さ”より深い概念を持つ一儀式のような言語行為が含まれる。

2. 研究方法

それぞれの国の概念は各国の母語の意味だけ含めるということではない。概念は母国の文化概念も含めている。最近、広島大学とその周辺にいる外国人は益々増えているので、文化概念の相違が見い出される。

2.1 資料収集

広島大学の中には留学生や外国人の教職員がいるので、大学にいる日本人は外国人と接触することが多い。大学の周辺にも外国人が毎年増えているので、外国人との接触も多くなっている。大学内と大学の周辺で働く日本人を対象にして、諸概念に対する評価をインタビューにより調べることにした。

2.2 調査の目的

本調査の目的は、①日本人が“外国人”と聞くと最初に考えることを明らかにする、②日本人はしばしば英語を外来語として使うが、英語の文化概念や日本語概念がどこまで理解されているかについて考える。

2.2.1 調査時間・調査方法・調査対象者

2018年9月初旬から2019年2月中旬まで広島大学と大学の周辺で学んだり働いたりしている人、合計106名（51名は大学の人・55名は大学の周辺の人、男性は42名・女性は64名、年齢層は18歳—79歳）を対象にインタビューを実施した。参加者は全員日本人である。筆者から趣旨説明し、回答をもらった。発音・語彙については本稿では扱わない。

2.2.2 分析方法

本稿は統計的手法は用いないため、繰り返しの単語によるグループを作った。「特にない」返事は参加の詳しい内容と評価によるものと仮定する。

3. 研究の結果

英語辞書、日本語辞書や参加者の回答を比較すると結果は以下の通りになる：

3.1 “高コンテキスト”と“低コンテキスト”の事例

文脈には言葉と文化の意味を含めている。西洋文化（特に米国）と東洋文化（特に日本）を比べ、区別は以下の通りである。

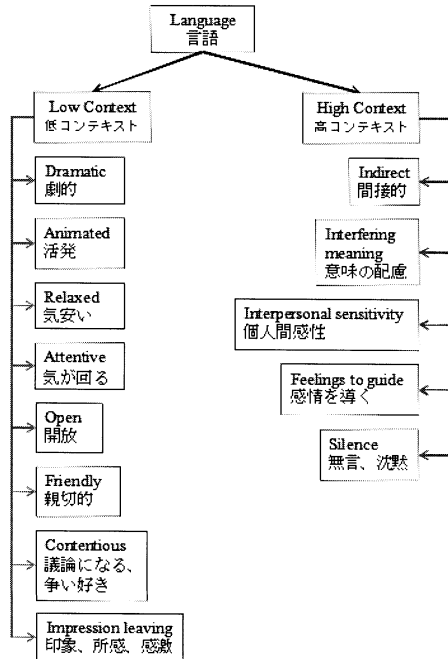


図1 文化、言語と文脈の関係性

図1では、文化の差異を言葉で表す。「高コンテキスト」の人は言語的に間接的であり、意味に配慮し、個人間の感性を持ち、感情を導き、常に無言な人である。一方「低コンテキスト」の人は劇的、活発、気安い、気が回る、開放、親切、議論好き、印象・感激を露にする人である。以上の図を見ると、言語は文化の概念を強調すると考えられる。

3.2 “外国人”と聞くと、最初に考えることは

「表現力が強い」：21人（20%）、「体裁・見た目」：13人（12%）、「日本人ではない・違う言語・文化の差」：60人（57%）、「特になかった」：12人（11%）。この結果では“日本人ではない”と回答した57%の参加者は“違う言語”、“文化差異”、“別国籍”などの語彙で自分の意見を説明した。20%の参加者は“表現力が強い”と“フランク”という語彙で説明した。12%の参加者は“外国人”と聞くと背が高いイメージがあると回答した。“特になかった”と回答した参加者は子供の頃から外国人と接触していた（英語の先生とは英語母語の先生、旅行など）。

3.3 英日翻訳による文化概念¹

英語の概念を説明するため、筆者は英語辞書を使った。同様に、日本語の概念を説明するために日本語辞書を使った。英日概念の比較の結果は以下の通りである。

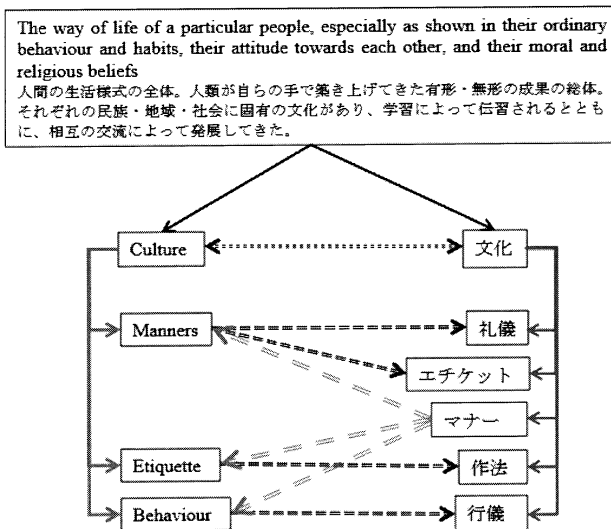


図2 文化、と文化の概念の英日翻訳の関係性

図2では、英語の“Culture”は日本語の“文化”と同じ説明をする。それは、「人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの

民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた」ことである。文化の区別は英語の“Manners”、“Etiquette”や“Behaviour”と日本語の“礼儀”、“エチケット”、“マナー”、“作法”と“行儀”は違う概念である。英語の“Manners”は日本語の“礼儀”（礼儀正しい）と“エチケット”を含む。一方、日本語の“マナー”は英語からの外来語であり、英語の“Manners”、“Etiquette”と“Behaviour”を含む。しかし、英語の“Etiquette”は日本語の“エチケット”とは違う。英語の“Etiquette”は日本語の“作法”と同じ意味を含んでいる。英語の“Behaviour”は日本語の“行儀”と同じ意味を含む。

“Manners”は話し方、態度と一般的な配慮のことである。“Etiquette”は儀礼的な食べ方、立ち方、話し方など。“Behaviour”は人の行動と他人に配慮することである。

3. まとめ

本稿では文化、言語と概念の関係性を考察した。日本人は英語などの外来語を使っても、常に“日本語ではない”或いは“日本文化の中にはないこと”と考える。英語母語の各国の文化概念については考えない。また、日本人は日本文化と文化の概念の紛らわしさに対して困惑する。同時に英語母語話者は日本語を翻訳する時に、解説の紛らわしさの解決方法が分からないので、翻訳の問題について対応策を決められない。

英日翻訳の欠点は文化概念における問題である。正しい翻訳をするため、より良いコミュニケーションをするためには辞書の言葉だけでは足りない。翻訳者、会話者などの各国の人々は相手の国の文化概念を理解すべきだと考えている。

このような状況下におけるより適切なコミュニケーションストラテジーを考えたい。経済・政治・教育・医療・日常生活の場面ではコミュニケーションスタイルの変化を受けて、新しい翻訳方略を考えれば、外国人とのより良いコミュニケーションを持つことができる。

コミュニケーションスタイルの変化と文化の変化をより良く理解するため、録音と写真が必要である。録音は会話で外来語の使い方を明らかにする。写真は日本人が外来語の概念をどのように解説するかを示す。その2つの収集方法からより良いコミュニケーションストラテジーとコミュニケーション

の翻訳ができる。

本稿ではコミュニケーションスタイルの変化を紹介したが、今回のデータには録音と写真の資料を含めなかった。インタビューの回答を記録し録音をしたが、誤解と自由回答（複数回答）の量が多いので、処理が難しい。

今後の研究はより詳しく言葉の概念の解読を行い、録音と写真の資料を含めた、より良いコミュニケーションの翻訳方略を提案する。実会話の言語方略事例は災害・医療コミュニケーション、ビジネスと政治の場面にも利益があると思う。

謝 辞

本研究に速く快く協力して下さった広島大学と大学周辺の全参加者に心から感謝いたします。

注

¹ 翻訳するため「Online Cambridge dictionary」、「Weblio 辞書」と「goo 辞書」を使用した。

【参考文献】

- Befu, H. (1999). Globalization of Japan: Its Implications for the Globalization Model. *Publications Nichibun*: 189-201.
- Berton, P. (1998). Culture Communication Negotiation Japan China and the SU. *Publications Nichibun*: 175-209.
- Brown, P. & Levinson S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ciubancan, M. (2015). Principles of Communication in Japanese Indirectness and Hedging. *Romanian Economic and Business Review* 10 (4): 246-253.
- Conley, J. & O' Barr, W.M. (1990). *Rules vs. relationship: the ethnography of legal discourse*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., and Heyman, S. (1996). The Influence of Cultural Individualism-Collectivism, Self-Construals, and Individual Values on Communication Styles Across Cultures. *Human communication Research* 12: 525-549.
- Hall, E. T. (1959). *The Silent Language*. Garden City. New York: Anchor Press/Double Day.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. Garden City. New York: Anchor Press/Double Day.

- Hall, E. T. (1987). *Hidden Differences*. Garden City, New York: Anchor Press/Double Day.
- Hannas, William, C. (1997). *Asia's Orthographic Dilemma*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Haugh, M. & Hinze, C. (2003). A metalinguistic approach to deconstructing the Concept of 'face' and 'politeness' in Chinese, English and Japanese. *Journal of Pragmatics* 35: 1581-1611.
- Holtgraves, T. (2005). Social Psychology, Cognitive Psychology and Linguistic Politeness. *Journal of Politeness Research* 1: 73-93.
- Kluver, Randy. (2013). *Globalization, Informatization, and Intercultural Communication*. United Nations Public Administration Network.
- Miyake, Marc Hideo (2003). *Old Japanese: A Phonetic Reconstruction*. New York, London: RoutledgeCurzon.
- Ogihara Y., Uchida, Y. (2014). Does Individualism Bring Happiness? Negative Effects of Individualism on Interpersonal Relationship and Happiness. *Frontiers in Psychology* 5 (135): 1-8.
- 佐藤・慎司 (2007). 「日本人のコミュニケーションスタイル」観とその教育の再考：アメリカの日本語教科書を例として。『web 版リテラシーズ』 4 (1)。くろしお版 :1-9.
- 横林・宙也 羅・明坤 (2010)。日中異文化接触場面における意識調査：中国人大学生の場合。西南女学院大学紀要 14: 147-163.
- オンライン辞書：
- <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/culture>
- <https://www.weblio.jp/>
- <https://dictionary.goo.ne.jp/>